令和八年度
学校推薦型選抜入学試験問題

地域創生学部　地域創生学科
国際共生コース　小論文

注意事項

一　試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。

二　問題冊子（十二頁）には、解答用紙（二枚）および下書き用紙（二枚）が挟み込んである。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出ること。

三　問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。

四　解答は、すべて解答用紙の所定欄（縦書き）に記入すること。

五　句読点は、一字と数えること。

六　試験室で配布された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰ること。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

次の文章を読んで、問題一と問題二に解答しなさい。

問題一　「自覚」して「自分の生」を生きるとはどのようなことかについて、著者の主張を要約しなさい（四〇〇字以内）。

問題二　傍線部の問いかけについて、誰かが信じるモラルや価値観、理想的アイデンティティを問い直すということはどういうことだと考えるか。これまで見聞きしたこと、あるいはそれらを踏まえた想定に基づいて論じなさい。（六〇〇字以内）。

私たちはなかなか思うように生きてゆけないし、そもそも、思っているように生きてすらいないかもしれない。分かっていることができないことはもちろん、自分が分かっているつもりでやっていることが冷静に振り返ると実は意図していないことをやっていたり、自分なりに考えて決断しているつもりが他の人たちにいつのまにか流されていたりなど、「自分らしく生きる」とはまったくもって難しいものである。だいいち、「自分らしく」といっても、そんな自分とはいったいなんなのか？　何を望んで、どんな人生を送ろうと思っているのか？　それについて本当に自覚的であるのだろうか。

もし今あなたが「金儲け」を人生の至上命題としているのであれば、あなたはサンクコスト（注1）に引きずられたりせず、さらに無料のオマケなどにつられて本来必要でないものを購入しないなど、経済合理性のもと徹底的に無駄を省きながら暮らすべきであろう。仮に無駄のように見えるお金を使うとしても、それは誰かとうまく付き合いながらその後のビジネスに活かすための「投資」であって「消費」ではない。最大限のベネフィットを算出するために最低限必要な――表向きは娯楽のように見えるときもある――ビジネス上のコストを支払うべく、「今」の観点からこれから先を見通して計算的に生きてゆく。これはホモエコノミカス（homo economicus）とも呼ばれる合理的経済人モデルである。

しかし、もしあなたがそれをうまくやりながら、どこか苦痛を感じたり、「全然面白くないなあ……」と飽きが来るとすれば、そのような経済合理的な生き方はあなたにとって理に適っていないということになるだろう。だとすれば、あなたがまず理解すべきは、あなたはお金儲けに関すること以外の感情と欲望をもった人間である、ということである。気付いてほしいのは、お金かそれ以外のいずれか一方が重要なのではない、ということだ。お金もそれ以外も重要であるからこそ、どんなときにお金を重視しつつ、どんなときにそれ以外を重視するか、という「選好（preference）」が人間理解において重要な意味をもつ。誕生日に恋人からお金をもらうよりも、ルイ・ヴィトン（注2）の鞄をもらう方が嬉しい。ただし、誕生日に勤務先の社長がヴィトンの鞄をくれるよりも、臨時ボーナスをくれる方がふつうは嬉しいだろう。なぜならそれは、勤務先の社長ではなく、恋人の方こそを非市場的な人間関係のもとで認識しているからである。さらにいえば、そのような選好体系のもとでは、ときに自分に近しい人や自分自身が積極的にコストを被ることすらも喜んで受け入れていることもある。たとえば、通常であれば、自分の財布や恋人の財布からお金が減るよりも、見知らぬ人の財布からお金が減る方がいくらかはマシである。しかし、誕生日に恋人の財布からお金が減る形でヴィトンの鞄をもらう方が、見知らぬ人の財布からお金が減ってそれがヴィトンの鞄となってあなたの元に届くよりも嬉しいかもしれない。そのときあなたは「恋人がお金を出して、自分にプレゼントしてくれる」ということを選好しているのだが、だからといって、恋人の財布の中身が減ってゆくことを望んでいるわけでもなければ、恋人を「便利な財布代わりだ」と思っているわけでもないだろう（本当に「ただの財布代わり」にすぎないならば、そのお金でヴィトンの鞄を買ってもらうことに関し、それが恋人だろうが見知らぬ人だろうが無差別なはずである）。つまり、人の「選好」「行動」の意味をきちんと理解することは、その人の人格を知り、何を大切にしているかを知ることにもつながるのだ。もし、あなたが「自分ってなんだろう？」と自分自身を知りたいとすれば、自分自身が何を選好しているか、そしてその選好はどのような意味をもっているのかを考えるべきである。

ただし、「選好」というものは、あなたが暮らす環境によって定着していたりするので生活環境を変えることでガ

ラッと変わることもあるし、あなた自身がこれから成熟するにつれて変化することもある。たとえば、あなたがこれまでずっとスラム街で育ち、学校に行って勉強することよりも周囲から舐められないことが自分の利益につながるような生活を送っていて、今現在誰からも雇ってもらえていないのであれば、あなたにとっては学校制度や医療制度の充実などはどうでもよく、生活保障費の増大を選好したり、あるいは、「貧乏な自分が一発逆転できるようなカジノを建設しろよ」といったリスク愛好的な選好をもつかもしれない。しかし、誰かがあなたを雇ってくれて定期的にまとまった収入が入るようになり、子どもをもち、将来の見通しがきくようになると、あなたはギャンブルよりも医療や福祉に関心を寄せるかもしれないし、もしあなたがもっと良い職に就こうとトライするも失敗して自分の人生を悔やむようになれば、あなたはスラムそのものを改革すべく政府がお金を投資することを選好するかもしれない（いわゆる社会的選好）。このように、「あれよりもこれの方がよい」という選好は、自身の立場・状況・成熟の度合いによって変わるものであって、或る時点の、しかも、未成熟な時点での選好に首尾一貫してこだわり続けることは、可変的な人生においてその総体をダメにしてしまいかねない。もし、今はもっていなくとも、将来もつであろう（もつべきである）選好があるとすれば、それに早く気付き、それに沿った判断・選択をするに越したことはない。しかし、人の人生一般に共通するそうした理想的選好はあるのだろうか。

人間の「本性（nature）」というものを二〇〇〇年以上考えてきた倫理学においては、成熟した結果、最終的に行き着く先の「理想的な選好」が存在する、とみなす論者は非常に多い。さきほども述べたように選好とは次第に変わるものであるので、一生同じ選好を持ち続ける人はあまりいない。子どものときにはフライドチキンとコーラが好きで、ホウレン草とほうじ茶は嫌いな人でも、五〇歳くらいになれば後者が好きになるかもしれない。ただし、それは個人的趣味ということで人によっていろいろ違いがありえるのだが、生き方の選好についてはどんな人にも或る程度は共通する最終的かつ理想的な選好が「自然にある」と考えられている。少なくとも、古今東西の倫理思想家たちは「ある」と想定した議論をしていたように思われる。彼らによれば、それをもっていなければ人間として不自然であるような、或る

意味で理に適った合理的な選好で、それは「理性」によって知られるものである。或る論者はそれを「徳(virtue)※1」と呼び、別の論者はそれを「義務(duty)」や「善(good)」、さらにはそれらを「幸福(happiness)」と同一視する人もいる。いずれにせよ、まともな人であればそれを望んだり重視したりするのは当然というものだ。だからこそ、教師は生徒に、あるいは、大企業の社長は社員たちに、「人はより高みを目指すべき」とか「社会の役に立つような人間になりなさい」とのお説教をする。そして説得力をもたせるためにこういうのだ。「そうすればあなたは幸せで悔いのない人生を送れるよ」と。

しかし、自己の能力を高めたり社会の役に立つことと、その人が幸福で悔いのない人生を過ごせることとは別問題である。それが楽しいと思えればよいが、本当は他のことをやって楽しみたいのに、そうした欲求を無理に抑圧して鍛錬に明け暮れたり自己犠牲的に振る舞ったりしていると、思わぬときに欲求不満が爆発したりもするかもしれない。それに「モラルに殉じる」という生き方は、美しいだけでなく危険性も孕(はら)んでいる。それはときに自分だけを傷つけるのみでなく、身近な人をも傷つけるし、さらには異なるモラルの持ち主も傷つけるかもしれない。

小説『すばらしい新世界』は、子どもは体外受精でつくられ、国家の管理政策のもと生まれもって知能や体格が定められ、それに応じた仕事へ就くよう人間がランク分けされている。人びとは洗脳教育とその後のソーマ(注3)や大衆娯楽によって不満を感じることなく、哲学・文学などのヒューマニズムを連想させる古典的書物は(表向きは)存在せず、人びとは薬によっていつまでも若さを保ち、人が死ぬときにも誰もが悲しみを経験することなく、いつでも誰とでも性交渉を楽しめる。そこでは特定の誰かを想い、束縛することはモラル的に正しくない。なぜなら「誰もがみんなのもの」だからだ。そうした価値観のもとで生まれ育ったレーニナはそれに殉じているが、しかしその外側で育って連れてこられた野蛮人ジョンはヒューマニズムを好み、そして、一夫一妻的な純愛に――できればレーニナと――殉じたいと願っている(私たちの社会でいえば、多くの人がジョンの側にいることを自称しているように思われる)。世界統制

官のムスタファ・モンドは実は野蛮人ジョンの価値観をよく理解しているのだが（実はシェイクスピアにも精通している）、それまでの世界で生じた各種失敗から学んでつくられた統制的な社会政策を重視し、その継続を誓っている。他にもいろんな登場人物はいるのだが、これら三人をはじめ誰もが自身のモラルに忠実に従っている。しかし、彼らが交わるとき、どうしても解消できないすれ違いが生じ、その結果、いくつもの悲しみが生まれる。ジョンに好意を抱くレーニナはジョンと関係を結びたがるが、それは或る意味では「みんな」にジョンを加えようとすることである。もちろん、そこには悪意はないし、むしろ善意だけがあるのだが、ジョンは「そんなのは真の愛ではない！」といって激しく拒絶し、むしろ、レーニナこそが目を覚ますべきだと考える。どちらも或る意味では善人である。そして、そんな社会を管理しているムスタファ・モンドでさえ「みんな」のためにそうした政策を実施しているのであって、登場人物のそれぞれがそれぞれの善意に満ちている。しかし、そうであるにもかかわらず、最後は悲惨な結果に終わってしまう。悪意がない優しい（小説の）世界でさえそうであるのだから、復讐心（ふくしゅうしん）や集団心理によって動かされがちな現実の人間が、異なるモラルの持ち主に対してどのような態度で接してしまうかは想像に難くない。

しかし、社会や「みんな」は、個人に対し「モラルは絶対守りなさい」と暗に強要する。それはそうだ。守りたくないときには破ってもいい、というのであればそれはもはやモラルではない。モラルとは或る意味では理不尽なもので、計算や打算に還元できないからこそのモラルであって、それは人びとの心に深く根を張り、人びとの心を根底から支えるものとなる。だからこそ、それを引っこ抜いたり薙（な）ぎ払おうとするような相手に対し、私たちは嫌悪感を覚えるのだ。ただし、問わなければならないのは、①私たちは異なるモラルの持ち主の存在そのものを本当に許せないのかどうか、そして、②自分の今現在を規定するようなモラルや価値観は、本当に自分の根っこであるのか、ということであろう。前者は寛容の問題であり、そして、後者は自身のアイデンティティの問題である。しかし、私たちはどこかで信じ切っているモラルや価値観、理想的アイデンティティを、人生において一度くらいは問い直す必要があるだろう。これまで絶対視していたモラルを一時的でいいので相対化し、「いくつかあるうちの一つの価値観」とみなすことで、あな

たはもしかするとあなたのそれとは異なるモラルの持ち主と仲良くなれたり、今の自分を変えてゆけるかもしれない。

どうか勘違いしないでほしい。これは別に「常識を常に疑え」とか「モラルなんて無視しろ」といっているわけではないし、「殺人犯の気持ちを理解しましょう」などといっているわけでもない。いっているのは、もしあなたが信じ込んでいる価値観があなた自身の可能性を制約する形で「生きる意味」を一義的に決めているとき、その価値観の外側においてあなたにとっての生きる意味が本当に存在しえないかどうかを問うてほしい、ということである。

この重要性を提唱した哲学者として有名なのはやはりニーチェであろう。ニーチェは「モラルや徳ある生き方を「真理」として人びとに語る哲学者・道徳家たちを批判し、それに従うことで良き生を送ろうとしている人びとを畜群と呼ぶ。ニーチェからするとこの世は畜群道徳で溢(あふ)れかえっており、キリスト教はもちろんのこと、民主主義、社会主義、それに無政府主義でさえも「道徳的真理によって人びとは救済される」と主張することで人びとを畜群に貶(おとし)めて弱体化を図る勢力といえる。「万人は平等であり、他人には共感すべきである」と利己性を超越する生き方を説くそれらの教義は、自らの派閥に人びとを囲い込むその内部において「良き生」を保証しつつ、良き生はその中にしか存在しえないと説くようなもので、それは人間の「矮小化(わいしょう)」「凡庸化」「価値低落」を引き起こす（『善悪の彼岸』第五章）。つまり、モラルによる囲い込みは人間の可能性に制約を課しているかもしれないのだ。

誤解をしてはならないのは、ニーチェのこの言から「ああ、真の哲学とは反社会的で反倫理的なものなのだな」と解釈してはならないということだ。「世間の価値観なんてくそくらえ」といっている人が「悪人」「犯罪者」、あるいは「反常識」に価値があると思い込んでいるならば、その人もしょせんは他人によって創られた価値にすがっているにすぎない。ニーチェがいいたいのは善悪を超越したところにある「自分の生」へと向かう意志（いわゆる力への意志）に従うことであって、それは「他人が用意したものにすがる」ということでもなければ、また、「他人が用意したものにすがらない」ということにすがることでもない。野球そのものを本当に好きな人は、読売ジャイアンツだからそれがやっている野球を称賛するわけでもなければ、ジャイアンツ以外の野球を無批判的に称賛するわけでもないだろう。同

様に、もしあなたが自分自身の「生」を愛そうとしているのであれば、あなたはまず、他人ではなくあなた自身が何を望み、何を意志しているのかについて考えなければならない。他人があなたに求める役割でもなければ、他人があなたに求めない役割でもなく、あなたが未来のあなたにどうなってほしいかをまず問う必要がある。もちろんそれは、孤独のなかでこそ有意味な問いであり、他人に回答を求めることを許さない厳しい自己吟味なのであるが。

気を付けなければならない。上記のニーチェ、あるいはニーチェ以降の実存主義者たちの力強い思想に勇気やきっかけをもらうのは構わないが、それだって一種の道徳であることを忘れるべきではない。「自分らしく生きなければならない」とそれが教説化して人びとがそれにすがりはじめるとき、それはニーチェが非難していたような畜群道徳・奴隷道徳へと転化し、外側から人の生き方を命じるような指針となってしまいかねない。ゆえに、有名な哲学者たちの格言や思想に惑わされてはいけない。いや、筆者であるこの私が語るこの「惑わされるな」ですら教説になってしまえば、それは人を惑わすものとなるだろう。もちろん、惑わされていても幸せになれる人はいるのだから、それでもいいというのであれば構わないのだが。

しかし、やはり惑わされすぎることには注意してほしい。また、「自分は惑わされてはいない」と思っていながら惑わされることも避けた方がよい。これはなにも、自分の価値観がいつの間にか「みんな」の影響下にあるかどうかに気を付けることだけではなく、「みんな」が何を考えているかについて勘違いしたり、その勘違いのもと誰も望んでいないことをやり続けて、時間やお金、あるいは未来へのチャンスをふいにしたりするということも含まれる。たとえば、飲み会の一次会の後、「みんな二次会に飲みに行きたがっているから、自分が一人だけ「帰ろうか……」とはいえないなあ」と思っているかもしれないが、実はそこにいる過半数が帰りたがっていることもあるだろう。しかし、長く続いている慣習・伝統であれば、それに反する人を「マナー違反」として非難することはありがちである。できれば、人はそうした非難を避けたい一方で、その非難を怖れない人物の不作法な態度を非難したくもなる。自分が守ろうとするも

のは他人も守るべきであるし、自分が怖れているものは他人も怖れるべきであるのだ。これがモラル特有の性質である「普遍化可能性」と、それに伴う「非難可能性」の恐ろしさである。しかし、自分であまりきちんとその意義を自覚していないモラルに、しかも、誰も本心では尊重していないモラルにとらわれすぎて、「二次会はやめとくよ」といって帰宅する同僚・仲間を非難すべきではないし、そもそも自分自身が行きたくもない二次会へと行ってお金と時間、そして多少の健康を犠牲にするのは愚かであることに気付くべきである。ただしこれはあくまでたとえ話であり、私自身は飲み会も二次会も好きである。もっとも、それに参加しない同僚・仲間を非難したりはしない。私が思うに、本当に二次会が好きであれば「独り二次会」であろうと喜んで行くべきであるし、そうであるがゆえに、自分と意見を異にする他人を恨んだり呪ったりすべきではない。幸せになるためには「みんな」の一致が必要であり、「みんな」が一致していないがゆえに幸せを感じることができずに他人を責めてしまうのであれば、そんな幸せにどれほどの価値があるというのであろうか。

つまるところ、社会的な価値観に従って生きようが背いて生きようが、哲学者の意見に従おうが背こうが、幸せになる人はなるし、なれない人はなれない。そして、どちらにしても変わらないというのであれば、せめて自分が何をしているかくらいは知っておいた方がよいだろう。自分の人生のなかで誰を守り、誰を傷つけるのか、そして、誰に対して責任をとろうとしているのか、反省しそれらをはっきり意識することで、自分が実際に歩んでいる生き方が見えてくるであろう。大切なのは「自覚」である。自覚がなければ、それはあなた自身のかけがえのない人生とはいえない。そしてその自覚が本当かどうかは他人には判別がつかないが、だからといって、その自覚っぷりを他人にわざわざ説明することもない。他人はあなたについて「解釈」はできても、あなたの自覚を本当の意味で「理解」することはできないからだ。そうした意味では、あなたをはじめ、人は皆孤独かもしれないが、それでよい。あなたの自覚はあなたにとって唯一の価値があるもので、あなた以外の人がみだりに「ああ、それって大事なことだよね」なんて言えるような凡百（ぼんぴゃく）のものではないのだ。その孤独のなか、「自分の生」を意識しつつ生きること、それこそがあなたにとっての「自由」で

あり、あなたの本質ともいえる。たとえ幸福を求めて迷路のごとき人生を歩んでいようとも、そして迷路の先には何もなかったとしても、あなただけがそこで気付きうる「自由」だけは――幸福がそれを与えるわけではなく――まさにあなたの自覚こそが与えるものなのである。

※1　倫理学においては「卓越した性格」と呼ばれるもので、医者には医者の、教師には教師の、というように、個々人において内在する「その人らしい素晴らしさ」ということもできる。

（中村隆文『自信過剰な私たち――自分を知るための哲学――』ナカニシヤ出版、二〇一七年　一部改変）

（注1）サンクコスト　事業や行為に投下した費用のうち、それらの事業・行為を中止したり縮小したりしても回収出来ない資金や労力のこと。「埋没費用」ともいう。

（注2）ルイ・ヴィトン　1821年にカバン職人のルイ・ヴィトンによって創始された、フランスの高級ファッションブランド。

（注3）ソーマ　古代インドの神話に出てくる神酒。神々と人間に栄養と活力を与え、長寿や霊感をもたらすという。小説『すばらしい新世界』においては、人びとの不安や憂鬱を取り除く効用を持ち、その飲用が常態化している薬のことを指す。